Ⅰ研究の概要

令和５年度　校内研修計画

１　研究主題

自尊感情を育む教育活動の在り方

～一人一人のよさを認め合い協働する授業をとおして～

２　主題設定の理由

（1）　社会的背景から

グローバル化や情報化など社会の急激な変化に伴う予測困難な時代をよりよく生き抜くためには、多様な価値を尊重・理解し、共に学んでいくことが必要である。また、学習指導要領総則には「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と記されている。さらに、文部科学省は2005年に「子供たちの実情を踏まえ、自他の生命を尊重し、学習や生活、仕事に前向きに取り組む力を育てるためには、自尊感情や社会性を高めることが必要条件となる。」と述べている。このことから他者を尊重し合いながら理解し共に学ぶ「協働」や、自分のよさや可能性に気付く自尊感情について指導することはとても重要であるといえる。特に自尊感情については、国際的に見て低いという調査結果がある。内閣府が行った「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成25年度）」では、自尊感情に相当する「私は自分自身に満足している」の項目において、日本の若者の平均値が 2.31（4点満点中）であり、日本を除く他国の平均値 3.07 と比較しても低いという調査結果がでている。各種の調査結果からも、教育において自尊感情を高めることは重要課題といえる。

心理学者のシェイブルスンは「自尊感情を育むためには学習への働きかけが有効であり、教員の学習指導は子供たちの自尊感情の向上に重要な役割を担っている」と述べている。全国学力・学習状況調査の結果からも「自分には、よいところがあると思いますか」との質問に、肯定的に回答した児童生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られたり、「先生に認められていると感じている」児童生徒の方が、自尊感情が高い傾向が見られたりした。このことからも、学校教育と自尊感情を高めることについては切り離すことができない課題であり、自尊感情を高めるには、他者と関わりをもって達成感や充実感を味わうなど、「協働」の中での活動が重要だといえる。

（2）本校教育目標との関わりから

本校の学校教育目標「やさしく・かしこく・たくましく」の具現化に向けて「ともに遊び・ともに働き・ともに学び」を合言葉に教職員・児童が生活している。学校経営方針の中には、「思いやりの心をもち、他に共感し、協働できることは自尊感情やふるさとへの愛情を育む重要な素質」と掲げており、協働や自尊感情を重要視している。子供たちが将来、社会を生き抜くためには、他者との関わりの中で、一人一人のよさを認め、個を大切にした教育、つまり自尊感情を協働的な学習を通して育むことが重要であるといえる。

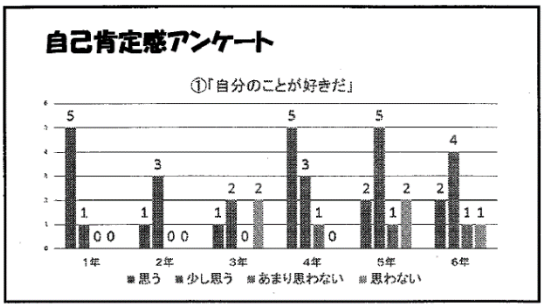
(3) 児童の実態から

本校は全校児童 36 名で単式学級が２学級(１年生・６年生)、複式学級が２学級(２・３年生と４・５年生)の学級編制である。他者を尊重し、多様な在り方を認め合う児童が多く、学年を問わず仲良く生活している。

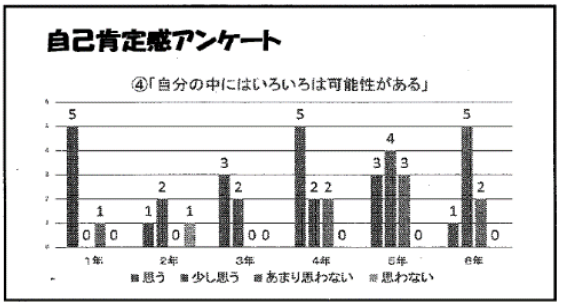
学力面を見ると、市の標準学力調査の国語・算数の結果は、２、５年生が全国平均を下回っている。また、どの学年にも特別な支援を必要とする児童が在籍しており、学級内でも学力の２極化が見られ、学校全体を通して、基礎学力の定着が必要である。さらに、学習での役割が固定化しており、上位の児童が低位の児童に教える場面がほとんどで、低位の児童が活躍できる場面が少ないことも課題である。

資料１、２のように、令和４年度に本校で行った自己肯定感におけるアンケートの中では、「自分のことが好きだ」、「自分の中にはいろいろな可能性がある」の項目において約３割の児童が低い回答をしている。授業においても受動的な態度の児童が多く、自信がなく、積極的に発表したり、他者に自分の意見を伝えたりすることができない児童が目立つ。

このような現状から、自尊感情を高めるためには、他者との関わりの中で、一人一人のよさを認め、個を大切にした教育を実践していく必要がある。



資料１



資料２

3　研究の全体構想

(1) 研究視点

個を大切にした授業改善や他との関わりを大切にした協働的な学習を行うこと、また、一人一人が学級への所属感を深める環境づくりを取り入れた教育活動を展開すれば、自尊感情を高めることができ、何事にも自信をもって取り組む児童の成長につなげることができるであろう。

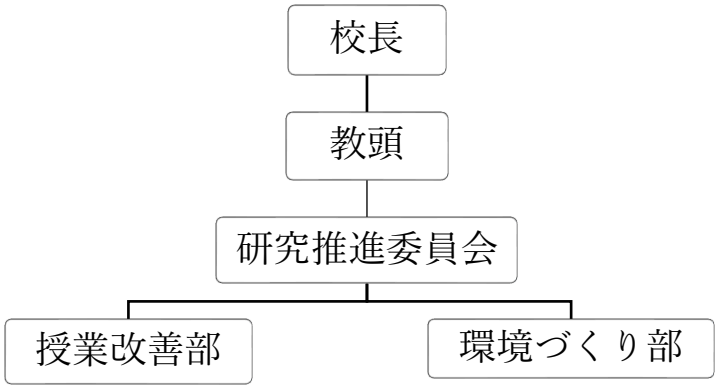
(2) 研究内容

①個を大切にした授業改善・他との関わりを大切にした協働的な学習
②一人一人が学級への所属感を深める環境づくり

① ・授業改善・協働的な学習
・児童にあった課題
・教具・教材・ICT の活用
・学習形態の工夫
・学習のユニバーサルデザイン化

② ・所属感を深める環境づくり
・児童会活動の重視
・掲示物等、校内環境の整備
・一人一人が活躍できる学校行事の工夫
・メディアコントロールチャレンジによる生活習慣の見直しや確認

（3）研究組織



4　年間計画

回数	学期	月	日	曜日	会種	内　　容
1	1	4	6	木	推進委員会	研究の方向性についての検討①
2		4	10	月	全体会	研究の方向性についての検討②
3		4	14	金	全体会	研究の方向性についての検討③
4		4	27	木	全体会	令和５年度の研究方針について
5		5	18	木	全体会	AED講習会
6		6	15	木	全体会	部会編成・活動内容の計画について
7		7	21	金	全体会	Chromebookの活用について　学映システム
※		8	3	木	全体会	自尊感情についての研修 東京都教職員研修センター　川嶋美武指導主事
8		8	8	火	全体会	特別支援教育についての研修 田平北小学校　木村栄指導教諭
9		8	31	木	全体会	自尊感情についての研修 長崎大学大学院　松下裕之非常勤講師
１０	2	9	14	木	全体会	第１回指導案検討（６年）
１１		9	28	木	全体会	研究授業・授業反省会（６年）※市教委指導
１２		11	9	木	全体会	第２回指導案検討（４・５年）
１３		11	16	木	全体会	研究授業・授業反省会（４・５年）※市教委中間指導
１４		12	7	木	部会	Chromebookの活用　学映システム
１５		12	14	木	全体会	出張報告
１６		12	22	金	全体会	研究の振り返り（次年度に向けて各部の話合い）
１７	3	1	9	火	全体会	オクリンク・ムーブノートの活用について
１８		1	25	木	全体会	１年間の取り組の振り返り
１９		2	8	木	全体会	本年度の研修の成果・課題、来年度の方向性について
２０		2	29	木	全体会	来年度の研究について

Ⅱ　研究の取組

1　自尊感情測定のためのアンケートの実施

児童の自尊感情について把握するために、客観的に数値化することが必要である。そこで、東京都教職員センターが発行している「東京都版　自尊感情尺度」を活用し、全児童を対象に６月に実施した。質問項目は低学年と高学年に分かれており、それぞれ 22 項目に対して４件法尺度で回答する。各学年の結果は下記のレーダチャートのとおりである。また、本校では東京都版自尊感情尺度に加えて、質問項目によっては自由記述ができる欄を設けた。

自尊感情測定尺度　小学生【第４学年～第６学年】・中学生・高校生用

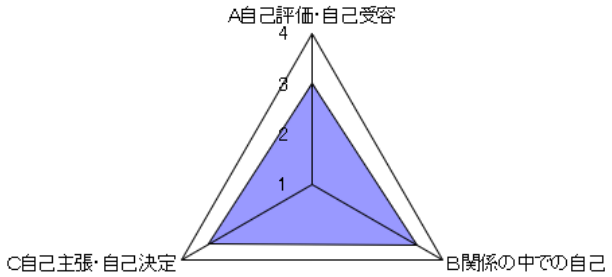
A自己評価・自己受容（8項目）	1	私は今の自分に満足している
	2	私は自分のことが好きである
	3	自分はダメな人間だと思うことがある（#）
	4	私は自分という存在を大切に思える
	5	私は今の自分は嫌いだ（#）
	6	自分には良いところがある
	7	自分は誰の役にも立っていないと思う（#）
	8	私は人と同じくらい価値のある人間である
B関係の中での自己（7項目）	1	人の意見を素直に聞くことができる
	2	私は人のために力を尽くしたい
	3	私はほかの人の気持ちになることができる
	4	私には自分のことを理解してくれる人がいる
	5	人に迷惑がかからないよう、いったん決めたことは責任をもって取り組む
	6	自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している
	7	私には自分のことを必要としてくれる人がいる
C自己主張・自己決定（7項目）	1	人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる
	2	自分の中には様々な可能性がある
	3	私は自分の判断や行動を信じることができる
	4	私は自分の長所も短所もよく分かっている
	5	私にはだれにも負けないもの（こと）がある
	6	私は自分のことは自分で決めたいと思う
	7	私は自分の個性を大事にしたい

（#）は反転項目

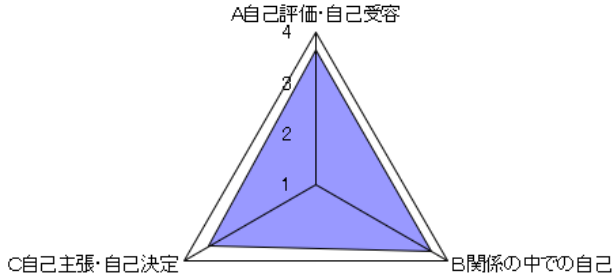
（１）結果

自尊感情の研究では、「低学年は自分を客観的に捉えることが難しく、自尊感情が高くなる傾向がある。」と言われており、本校の結果でも１～３年生は比較的高い数値が示された。一方、４・５年生になると、「自己評価」や「自己主張」における数値が徐々に減少しており、このことは、自尊感情における先行研究のとおりであった。また、本校６年生においては全体としては高い結果を示しているが、個々の児童を見ていくと、自尊感情の低い児童がおり、支援の必要性がうかがえる結果となった。

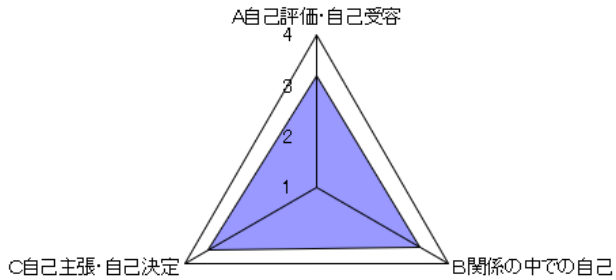
集団の結果　1年生



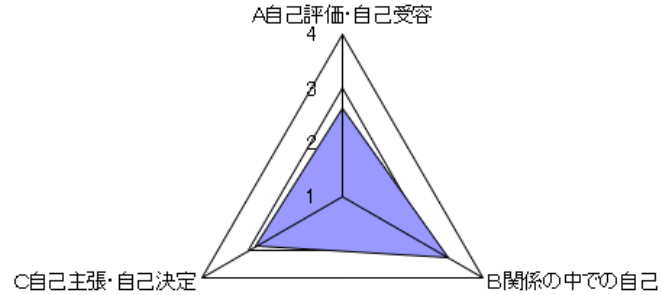
集団の結果　2年生



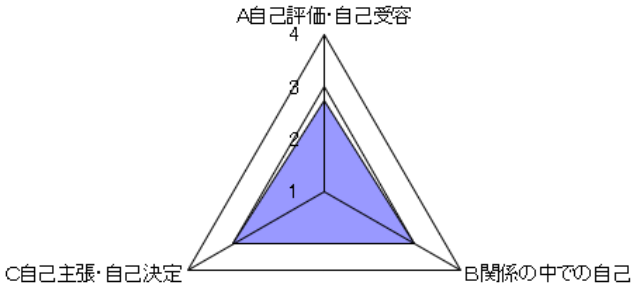
集団の結果　3年生



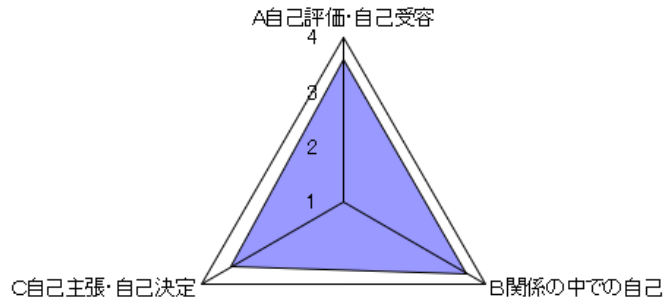
集団の結果　4年生



集団の結果　5年生



集団の結果　6年生

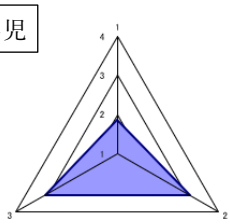


（２）個別の結果

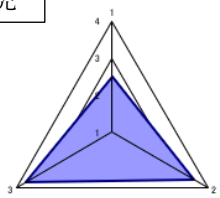
個別に見ると、自尊感情の低い児童が見られた。

下記に特徴的な児童を示す。１年男児では、日ごろ、授業中はいきいきと発言をしているが、調査から、内面は消極的な様子がうかがえ、実際の姿とのギャップが見られた。一方で、５年女児の結果は、日ごろの生活の中でも自信がなく、消極的な発言と一致する結果となった。

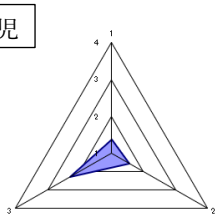
１年男児



３年男児



５年女児



また、東京都版自尊感情尺度に付け加えて、自由記述の欄を設け、数値では測ることのできない個人の意見について着目をした。以下は、個人の記述内容を一部抜粋したものである。学習内容に関連するものが多く記載されていた。

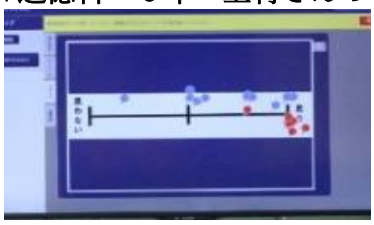
自分はダメな人間だと思うことがある	・面倒くさがり ・だまりこむところ ・すぐやめる ・文句を言う ・宿題をしない ・漢字を覚えきれない	・声が小さいところ ・大きな声で話せない ・漢字が書けない ・勉強ができない ・けんかをする ・発表ができないこと	・返事をしない ・返事ができないこと ・話を聞いてないところ ・何でも人に聞いてする ・チャレンジをしない ・勉強があまり好きではな

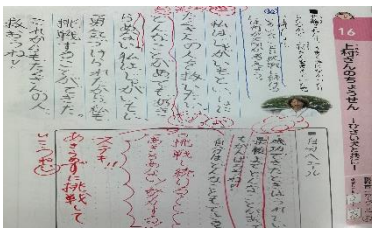
２ 研修の実施

研究１年目は、自尊感情について外部講師を招いた３回の研修を行った。１回目は東京都教職員センターの川島指導主事に自尊感情について、２回目は平戸市立田平北小学校・木村栄指導教諭に特別支援教育及びユニバーサルデザインについて、３回目は長崎大学大学院教育学研究科の松下裕之非常勤講師に人権について講義を行っていただいた。各研修で指導していただいた内容や実践は以下の「授業の実践」、「授業外の実践」、「ユニバーサルデザインの視点」で紹介する。

３ 授業での取組

●「道徳科・６年　上村さんのちょうせん」





６年・道徳科ではムーブノートを活用した授業を行った。

アンケートを導入と終末で行ったが、ムーブノートのスタンプ集計を使用することで、児童の考えの変容を教師と児童が即座に確認できた。また、児童がノートに自分の意見を書いた後に、それぞれに肯定的な意見を書く時間を設けた。「○○さんの●●の部分は素敵だね。」など、直接相手への言葉かけがあり、自信をもって、その内容を発表する姿が見られた。45 分の中で友達と意見を交換し、認め合うことができた。終末では、あきらめそうな自分へのメッセージを発表し、学級全員が拍手を送るなど、一人一人が輝き、自尊感情を高める授業となった。

課題として、ムーブノートを多用することで、授業前半は児童があまり発言することがない流れとなった。

授業での取組では自尊感情を高める手立てとして、教材・教具の工夫、指導形態の工夫を行った。主に ICT の活用として、ムーブノートやオクリンクを中心に教材を作成した。以下、研究授業で使用しての ICT のメリットとデメリットを記載する。

メリット	デメリット
・児童同士もパソコン上で全員の意見を素早く把握できる。さらにコメント等も自席から送ることができ、自分の意見への自信がもてる。 ・アンケートの事前と事後など、簡単に集計ができ、終末で比較が容易にできる。	・パソコンのスキルの差が出る。 ・じっくりと考える時間が取れない。

●４・５年生　特別活動　「運動会がんばった会」

４・５年生では、運動会後に、友達のがんばったところ、良いところを伝え合う活動を行った。活動当初は、友達から褒められてうれしいという感想が多かったが、「次の行事では、友達の〇〇な気持ちがうれしかったとか書いたらどうかな？」と発言する児童もおり、具体的な良さを認め合えるようになってきている。

4 授業外での取組

授業外での取組では、校内の掲示の工夫として、互いに認め合ったり、友達の良さを見つけたりする取組を行った。また、ユニバーサルデザインの視点として、自主学習の様式を統一したりコグトレを導入したりした。

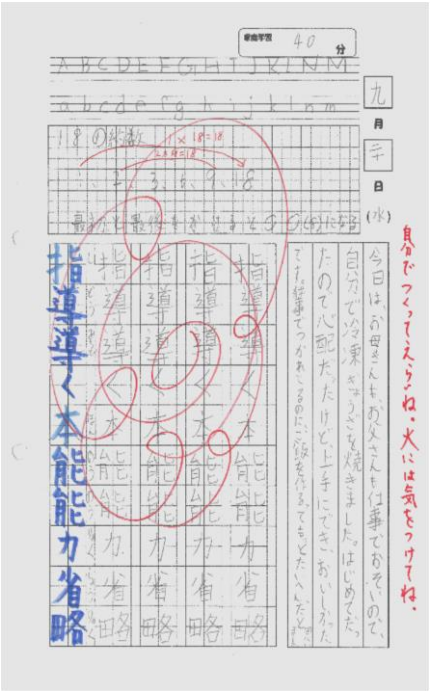
●「全校での活動：笑顔いっぱいワンダフォー」

掲示教育の工夫として、全校児童の「素敵なところ探し」を行った。２学期の代表委員会において、児童から「友達の良いところを探す活動をしたい。」という提案があり、デザインや方法などを児童が主体的になって決定をした。児童が書く内容は、①友達の良いところ、②自分のよいところ、③学校のためにしたことの３つに分類をして書くようにした。自分のがんばりを自分で認めること、他者を意識すること、所属感を高めることに視点をおき、掲示教育を行うことができた。学級の友達だけでなく、異学年から互いを認めあうメッセージを書くことで、日ごろと違う充実感を味わうことができた。また、自分たちで計画したものを進めていくなど、児童が主体となって活動することができた。

●「ユニバーサルデザインの視点」

自尊感情を高める方法の１つとして、学力への働きかけが有効であると言われている。学力向上や学力の定着の目標として、田平北小学校・木村指導教諭に紹介していただいた、自主学習の様式を本校でも取り入れた。漢字、計算、アルファベット、作文、意味調べなど、１枚のプリントで、少しずつ毎日学習を積み重ねることで、学習の定着を目標としている。

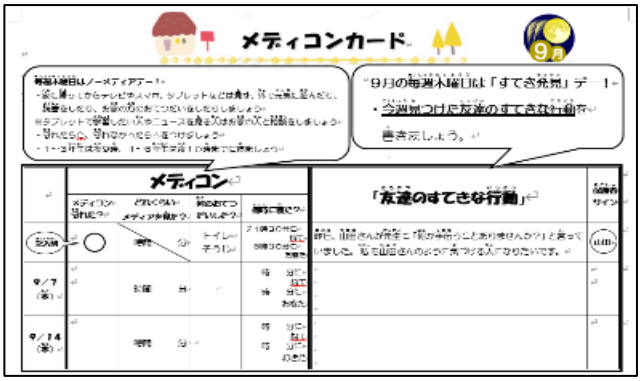
また、「コグトレ」を２学期から導入した。認知機能強化トレーニングを行うことで、自尊感情に関連する「自己効力感」を高めることが期待される。コグトレは学習の土台である認知機能をトレーニングすることができ、児童がゲーム感覚で楽しみながら活用することができ、主に朝の時間等に積極的に活用している。



5　生活面での取り組み

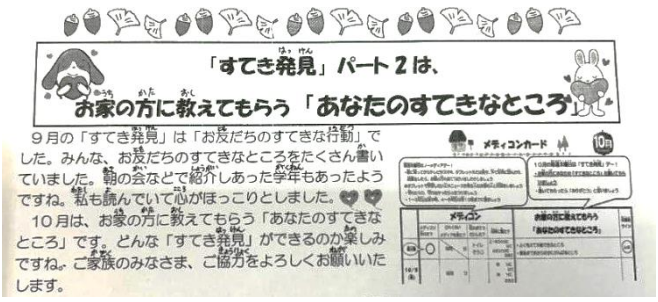
「メディアコントロールチャレンジ・ほけんだより」

生活習慣や睡眠が自尊感情と相関関係があることが指摘されている。本校では生活習慣を見直す活動として、「メディアコントロールチャレンジ」を、毎週木曜日に年間を通じて実施している。本年度から、カードの中に自尊感情に関連したことを記載する欄を設け、児童・保護者が取り組んでいる。メディアコントロールカードに書かれている内容は、学活や朝の会の時間にお互いに発表し、互いの良さを知る機会としている。また、定期的に、「ほけんだより」においても、自尊感情に関する内容を発信している。「メディアコントロールカード」には保護者からの温かい言葉や、日ごろ学校では把握しづらい児童のがんばりなどを発見する機会となり、自尊感情の高まりにつながった。



＜自尊感情を高める項目について＞

６月	「ありがとう」と言った出来事
７月	「ありがとう」と言ってもらった出来事
９月	今週見つけた友達のすてきな行動
１０月	おうちの方に教えてもらうあなたのすてきなところ
１１月	友達のすてきなところ
１２月	おうちの方のすてきなところ
１月	おうちの方へ伝えたい「ありがとう」
２月	自分のすてきなところ



Ⅲ　研究の成果と課題

1 授業改善・協働的な学習について

（児童にあった課題、教具・教材・ICT の活用、学習形態の工夫、ユニバーサルデザイン）

□成果

○　オクリンクを使って、児童が主体的にまとめたり、ポイントを書いたりするなど、ICT を効果的に活用することができた。

○　全校で形式を揃えた自主学習ノートや本読み計算に取り組むことで、学力の向上につながっていると感じる。

□課題

●　変則複式での授業において異なる教科での ICT 活用は有効であったが、児童任せになっているところが課題である。

●　ICT とノート等、デジタルとアナログをうまく使い分けていくことが大切である。

●　学習形態では教師－児童となってしまい、児童－児童が協働的に進める場面が少なかった。特に、複式の形態での学習を深めることができなかった。

2 所属感を深める環境づくりについて

（児童会活動、掲示物、環境の整備、学校行事の工夫、メディアコントロールによる生活習慣の見直し）

□成果

○　掲示は山田小学校オリジナルのものを行うことができた。代表委員会と関連して取り組むことができ、自治的な活動になった。保護者にも記入してもらうなど、幅も広がりそうである。

○　メディコンカードにとても温かい言葉が記入されている。メディコンでの取組を学級で紹介してもらうことでより効果的になっている。

□課題

●　環境づくりについては、しっかり文面化したうえで、役割分担を明確にしたほうがよい。

3 研究全般について

□成果

○　夏季休業中に研修を受けることによって、教員の資質・能力が高まるだけでなく、研究の方向性が定まった。

○　授業だけでなく、コグトレ、自主学習、掲示物、メディアコントロールチャレンジなど、様々な方面からアプローチをすることができた。

○　自尊感情を高める様々な取り組みのなかで、「じぶん」「友だち」「まわり」を大切にしながら、意識化につながっていると思う。認めてもらう機会も増え、子供たちに自分を見つめなおすこと、友だちのよさを見つけていくことが増えていると思う。全校での取組、保護者からの声など、さまざまなアプローチがあるところもよいと思う。

□課題

●　児童の自己肯定感を高めるために学習を基盤とした手立てを行っているが、全職員が共に課題に向けて取り組むことが大切である。

●　自尊感情が高まったかどうかの指標をどのようにするのか。アンケートの結果だけでは、自尊感情の高まりを評価することができない。